九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平安文学の背景をなすもの ： 藤原道長と法成寺とについて

穴山, 孝道

https://doi.org/10.15017/12293

出版情報：語文研究. 16, pp.76-82, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

平安文学の背景をなすもの

——藤原道長と法成寺とについて——

穴山孝道

一、法成につい考察を試みる理由

平安時代の仏教信仰は雑信仰であったと言はれる。しかもそれは仏教内部だけの雑信仰ではなくて、それに神道的なものと呪術的なものと民間信仰的なものをまで交へた、複式雑信仰であった。元来わが国の信仰はその初めから雑信的性格を持ってをり、それが現代にもなほつづいてゐるのであって、平安時代に限ったことではないが、形迹に最も著しく現はれてゐるのが平安中期である。具体的には藤原道長の法成寺経営がそれを代表する。僧俗貴賤有智無智いづれも世を挙げてそれを讃嘆したこともその一つである。栄花物語の作者が、大日如来、薬師如来、九体の阿弥陀如来のそれぞれの供養の情況に、おのおの別に巻を立てて述べてゐることなども、単に供養の時日が別々だったからといふだけの理由ではなく、それぞれの仏如来に対する信仰が作者の内心に籠ってゐたからであらう。少なくとも道長の信仰態度を全面的に是認してゐたことは確実である。

わが国の信仰に於ける雑信仰的性格は別に詳論すべきものであるが、今ここに簡略して言ってみると、アニミズムの太古は別として、天照大神への信仰と、大物主系の神々への信仰との同居、ちはやぶるあしき神（残賊強暴横悪之神）[註1]への信仰も時を同じくし、処を同じくしつつ永く生きてゐたと言へるのである。渡来した仏教も、平安中頃過ぎるまでは、拝む対象がふえたといふだけのことで、仏像も経巻も堂塔も雑信仰のうちの拝む対象の一つであったに過ぎない。三宝興隆の迹が今になお世界の人の眼をおどろかしてゐる奈良朝の仏教信仰にしても、続日本紀や万葉集から読み取れる限りでは、例外的少数者のほかは依然たる雑信仰の持ち主であった。もともと、仏教自身が雑信仰の要素を内蔵してゐるのであるから、平安仏教の大体が雑信仰であったとしても、それはむしろ当然といふべき現象なのである。

しかし、法成寺経営の上に著しく現はれてゐる複式雑信仰の様相を、ただ「雑信仰」の一語で片付けてしまってはいけない。勿論、それは、南都東大寺に擬して更にその右に出ようとしたことなどの問題をは除いて、信仰関係にだけ絞って考へてのことである。このことを究明すれば、平安貴族の仏教信仰、といふよりはその宗教感情乃至信仰生活の実体を探り当てることができそうに思ふし、又当

代文化の内面に触れることにもなるはずである。そうして、その結果と文学作品に現はれた宗教感情や宗教常識とを照合することによって、文芸と宗教との相関現象が把握できるはずである。つまり、雑信仰の内的究明は、平安文化のある断面を検知することになるのである。

道長は横暴であったがまた剛毅でもあったやうである。しかし、鬼神の類を畏れることは人並みだったのではないかと思はれる節がある。祟るも祟られるも、そういふことは一般的な問題なので、藤原氏には限らないはずであるが、この一族には頻繁にもののけが祟ってゐる。中でも関白となり氏の長者となった者の一家は殊に多くの怨霊に悩まされてをり、道長が病気の折など、いろいろと祈禱しても験しがなく、さまざまのもののけが憑坐(よりまし)に乗り移って祟る理由を述べるうちに、「げに[註2]さもと聞ゆる」もあったといふから、権力財力獲得独占のために、自他共承知の上での無理非道が行なはれてゐたことも推察されるし、無意識に他人を傷けてゐる場合は更に多かったことと想像される。

そうした事情が、この頃の権力者の建てた寺々に、悪魔怨霊を降伏せしめる神としての不動明王以下五大尊を安置する慣はしを作ったもののやうに思ふ。道長の場合、法成寺は本尊が大日如来であるから、密教の教義として五大尊を配置するのが当然で、五大尊安置の理由を怨霊思想にのみ求めることは妥当を欠くと思はれる。しかしまた、純粋に教儀的なものと考へることにも抵抗を感ずる。その間に、追求すべきものがあるやうに私は思ふのである。

二、藤原道長の人物行動に対する概略

藤原道長の越権横行はその在世の時から世に響いてゐたことであつたらしく、自らも敢へてそれを改めようともせず、時の人も抵抗は感じながらもそれを容認してゐたやうに見える。いはば「傍若無人」が人間の姿を借りて世間を闊歩してゐたのである。しかもそれが権力と財力とを一手に収めてからのことではなくて殆ど天性ともいふべき有様だったため、却って不自然さがなく、自身が当然の行動として怪まなかったと同時に、世人も「御宿世」としてむしろ感歎してゐた如くである。道長の行動については終始批判的であった大鏡の著者でさへ「天地にうけられさせ給へるはこの殿こそおはしませ」といってゐるのを支證としてよいであらう。[註3]一再ならずその行動について非難の記事を遺してゐる藤原実資ですらも、罵憤を口外することはなかったやうであるし、道長邸への参候は怠ってゐない。曽ては関白候補として門閥も才智も道長を凌いで羨望されてゐた藤原公任[註4]も、道長からその才能を認められることに無上の光栄を覚えて感激してゐるではないか。まして、直接の被害者でもなく、同族間の隠微な軋轢とは何らの利害のつながりもない民衆が、その超人的な表面の様相に見惚れて、額に手を当てて拝みたくなるのも無理からぬ話であった。道長は治世の英雄であった。——その時代は現代的な意味で決して治世とは言ひ得ない。竊盗強盗群盗放火殺傷は相次いで起ってゐながら取締る術を知らず、穀倉院の穀物が奪はれ、道長邸からも沙金二千両が掠められる。九州は海賊に襲はれ

たりもした。庶民の生活も安定してゐたとは言へないが、戦闘といふほどのものはなかった。貴族にとっては治世だったと言ってよいであらう。――庶民の眼に英雄として映っただけではなく、貴族たちの心にも英雄の巨像として覆ひかぶさってゐたのである。英雄といふものは、本来ならば高度の智識乃至文化を持つ社会には存在し得ないはずのもので、平安の貴族文化は既にそうした段階に達してゐたはずであるにもかかはらず、道長の超越的「宿世」が、時の貴族たちを精神面に於いて低文化の庶民の世界に推し下げてしまったのである。それは、権力と智力とを兼ね備へて、満々たる自信の上に不断の努力を以てその三つの力を培養蓄積して怠らなかった道長自身が築き上げたものであると同時に、時の思潮であった[注5]「宿世」の観念が然らしめたものでもあることを知らねばならぬ。

千年の歳月を経過した今日、いろいろの資料を参考綜合してその行迹を見渡すと、空前絶後の彼の果報も、天の賦与でも父祖の遺産でもないことが知られる。勿論、東三条院詮子の強引にして執拗な援護が無かったならば彼の果報は成就しなかったかも知れないし、競争相手だった伊周の不人気や隆家の失錯が幸したとも言へるではあらうけれども、畢竟するところ、道長自らが求めて得た福禄である。綿密な計画を忍耐のうちに積み重ねて、その学識と権媒と世故とを巧みに調和した結果の成功なのである。最高の権力を掌握し最大の財力を擁するに至って、越権も横行も天賦の人徳として世に許されるやうになると、それまでの過程ではさすがに[注6]心の鬼に責められて忸怩たることもあったに相違ないが、その果報が殊勝なものとして世に受けられるほどにやがては自らその殊勝さに酔って、家門の栄花を「さるべき」ものと思ひ込んでしまったかのやうでもある。権力の能ふかぎり、財力の及ぶかぎり、政事はいふに及ばず、仏神の道、儒教、文学、美術、工芸、土木、当時のすべての文化を憚るところなくその掌の上に翫んだ。法成寺の経営はその尤なるものであり、寛弘三年の三、四月僅か旬日の間に七千五百巻に余る[注7]書藉を蒐めたことも権と財との力が伴なはなければむつかしかったであらうし、上[注8]東門院の邸宅を営むためには他人の生活をおびやかして顧みず、無量寿院の落慶を急ぐためには[注9]諸国の地子官物が等閑にされても気にかけないといったところもある。小一条院敦明親王の東宮辞退は明らかにその隠険な圧迫の結果で、さればこそ三条院の御霊が道長を悩ませたとの[注10]風聞があった。そうした俗の俗なる面を持ち過ぎてゐることは否定できない。

その他面、道長は自らの心力を鍛へることに熱心であった。[注11]長保四年から寛弘二年にかけて天台三大部を読み、上述の寛弘三年に蒐めた書藉のうち二十巻余りについては[注12]棚厨子二双を作って坐右に置いた。当時は書藉を保存するのに唐櫃様の容器を用ひたが、それでは閲読に不便で死蔵に陥り易い。棚厨子の工夫は書藉活用の用意である。その書目は三史・八代史・文選・文集・御覧・道々の書、日本書紀等及び、令・律・式等であった。また文献に遺る證拠はないが、法華経の講義も聴いたであろうし、源為憲の三宝絵詞や源信僧都の往生要集も信仰の心を以て読んだものと思ふ。往生要集の成立は寛和元年、道長二十才の時であるが、道長がそれを読んだとすれば、やはり長和寛弘の頃であらうかと思はれる。何故かといふに、長徳元年三十才で左大将となって、内覧の宣旨を賜はり、やがて右

大臣、氏の長者と、五十日ばかりの間に忽ちに宿望のすべてを獲得した後数年間に、彰子の中宮入内を遂げ、政治的にも財政的にも社会的にもその最高地位が完全に安定したので、今までの魂のみの強さを、漢字と内典との才によって更に鍛練しようとしたものと考へられるからである。ひたぶるに家門の繁栄を謀って全力を傾けてゐる間には、未だ滅罪生善を心底から希ふまでの余裕は考へにくい。

三、道長の廻心について

道長が聖徳太子の再来とか弘法大師の生れ変りとか言はれたのは、法成寺建立以後であること疑ひなく、存生中ではあったかも知れないが、極く晩年のことで、壮年時代とは関係がない。道長と仏教との関係が知られるのは、長保三年十二月、姉詮子皇太后の崩御に遭って、讃法華経二十八品和歌を諸卿に徴したのが初めである。藤原有国の筆になるその序に「偏帰妙法、口読手書」とあるから、それ以前法華経を読んだり写したりしてゐたではあらうが、それも至って近い時からのことであらうと思はれる。内覧の宣旨を被ぶり、氏の長者となってから六年目、彰子入内の翌年三十六才の冬である。

その翌年の正月四日、法橋覚運から摩訶止観の講義を聴いた。藤原行成の日記「権記」によれば、実資、俊賢、公任、誠信、行成らも共にこれを聴いてをり、その聴講は引きつづいて行なはれてゐる。道長たちが摩訶止観の行的内容についてどれだけ領得したかは知る由もないが、発心、持戒。鬼魔二病に対する説など特に深く感ずる所があったのではないかと思ふ。引きつづいて寛弘二年までの四年間、つまり道長四十才までに法華文句と玄義を聴講してゐるがまた外典をも勉強して読んだものの如くであるから、この間に、曽てのひたすら家門繁栄のために謀って手段を撰ばなかった心情に、宗教的に倫理的に、何らかの変化が進みつつあったものと思はれる。つまり廻心が萌しつつあったのである。彰子に皇子がさしつづいて誕生し、更に敦成親王の立坊といふわけで、道長の境遇は最高度に安定する。その現はれとも言ふべきものは、御堂関白記、寛弘二年十月十八日、浄妙寺の堂供養の条に

余取火打、白仏言、此願非為現世栄耀寿命福禄、只座此山先考先妣及奉始昭宣公諸亡霊、為無上菩提、従今後、来々一門人々、為引導極楽也。心中清浄、願釈迦大師、普賢菩薩、自證明給云々

と見える一条である。当時の仏教信仰は、釈迦の本意とは違った現世利益の信仰が一般であった。道長と雖も従前はそれの例外ではなかったが、今は此の如くに「現世栄耀寿命福禄」の願を否定して、専ら無上菩提を求めるのだと、自らに言ひ聞かせてゐるのである。また、同じ日記の寛弘八年三月廿一日の懺法の記事には、「滅罪生善」のためであることを強張してゐる。無上菩提の語についても、滅罪生善についても、厳密な概念規定が必要なので、現代人の文字だけの智識に基づく常識的解釈は誤りのもとなる。だから、簡に過ぎる説明は避けたいのであるが、一口に言へば、共に後生善処、即ち往生浄土、即ち極楽に生れかはることを願ふ意味である。また同じ寛弘八年三月廿七日の条には、無量寿院落慶供養の願文に、大江匡衡が道長の意志に反して現世利益を願ふ語句を多く用ひたといふので、次のやうに記してゐる。

供養仏経、是只為後生也。作願文。匡衡作、非本自、多云現世事。仍令改直。等身弥陀仏、同経百巻。今年可重慎。而所修多是為現世也。此度只思後生。請僧五十許口、件等僧只家中所住僧、南北名僧也。檀々修善番僧不預此座。講師院源僧都、演説未曽有。如心開本意、衆人所感無比云々

これに対して行成の権記の同日の条にも同じ事件が記してあり、道長の記すところの真実性が確認される。また「法成寺金堂供養記」にその願文の全文を載せてゐるが長文に過ぎるので抄記して参考にする。

為滅罪生善往生極楽之故、建立一〔宇〕精舎。庶幾九品蓮台及以法華常行、昼夜時日、種々所作、一々有之（中略）

推其善根、莫不皇恩。方今帝王儲皇之祖、雖貴若不勤其奈菩提何、三后二府之父、雖厳若不懺其奈罪業何、縦雖仮人力於万民、何有忘仏事於一時、大凡地有勝境、因人而後開、人有心匠、逐物而後知、建立道場号法成寺、境心相固有時耳。瓦葺金堂草創已成、配天而連金瑞、土地而鋪玉墀、毎柱図両界曼陀羅、毎扉書八相成道変。其内安置仏菩薩六天像。華高三丈二尺金色大日如来坐中央、百葉蓮華座荘厳微妙也。一々蓮華葉上、百躰釈迦又現。同金色二丈釈迦如来、同薬師如来、文殊師利菩薩、弥勒菩薩、相好円満。左右圍繞、金色九尺梵天帝釈及四大天王、為住持仏法、鎮護国家也。（中略）

五大尊堂同以造之、安置彩色二丈不動尊、一丈六尺四大尊。為降家門成怨之怨霊也。為専弟子臨終之正念也。（中略）

釈迦如来説曰、若有人、彩画仏像、書写経典、建立伽藍、供養衆僧、当知是人永離生死、成無上道。側聞所服膺也。（中略）

抑弟子偏求菩提、不求栄耀、朝廷不得已、百官以卒由。（中略）

以善根之上分先奉資於霊儀。金輪久転、我法可久弘。玉燭長明、我寺可長興。長秋共其徳、少陽重其明。准后之家、摂籙之寄、及卿相納言男女子孫、氏族繁昌、其麗不億。（下略）

のやうに、経文寺塔仏像等を供養する本意が滅罪生善にあって現世の利益に拘はらないことを頻りに強張してをり、怨霊を降伏するための祈りは、その事を目的としてゐるのではなくて、臨終の正念を妨げられないための用意だといふのである。道長が呪詛されたり、怨霊に憑かれたりしたことは珍しくない。道長の如き境偶地位に在る者は、恐らく、常に多数の怨霊にとり巻かれてゐるのであらうから、臨終に殊にその人の神身を悩乱させようとする怨霊から正念を守るためには、不動尊以下の五大明王に祈らざるを得なかったのである。しかしそれは、既に第一章で触れたやうに、法成寺の場合は密教の教義に基づくもので、怨霊調伏がその理由の全部だったのではない。

摩訶止観には造寺造像の功徳を否定して、難解難入ながらも法華経の一字一句を受持することの功徳を説いてをり、そうした偶像的信仰表現の無意味を示す説話や文学が既にそれ以前の中国にあり、わが国にも語られてゐるが、平安貴族の耳目はそれを受け付けなかったことを、こゝにいふまでもなく、その證拠を、貴重な美術品として現在にまで遺してゐる。美術工芸をそのまゝ宗教として讃仰したもののやうに見える。そしてまた、美術と文芸とのけぢめも、形式の差別に過ぎないとされてゐたのではないかとまで思はれる。平安の文学に大きな潜在勢力を与へてゐる文芸即宗教といふ観念の形

成も、まことに自然の勢であったと思はれる。白楽天の狂言綺語讃仏乗思想が影響したことは否めないが、内面的理由も十分に存在したのである。

四、法成寺建立の動機と目的

法成寺の建立は、西方極楽浄土をこの現実の人間界に造り出さうといふ道長の願ひが実ったものであるといふ意見が夙くから提出されてゐる。栄花物語の記事など、法成寺関係の文献を一通り見れば誰でもそのやうな思ひ具体的にさへ抱くほどに、それは自然な意見である。浄土信仰史の第一頁に当るこの時代の人々は、栄花物語の作者をはじめとして、心から、この寺を地上に出現した極楽浄土と思ったことであらう。もしかしたら、道長自身すら、内心そのやうに思ったかも知れない。少なくとも、落慶供養の当日は、そんな気持になったことであらうと想像される。堂塔伽藍、仏像荘厳に善美を尽して、工芸美術の粋を蒐めた点では、まさに浄土の顕現であったであらう。大鏡などが伝へてゐるやうに、その意味ではたしかに東大寺を凌いでゐたと思はれる。しかし、仏教教義としての正しい浄土思想は、厭離穢土を必要条件とする。地上の浄土などいふ観念は決して成り立たない。比喩としてならばともかく、信仰としては絶対に考へ得ないことなのである。

浄土真宗が指方立相（西方十万億土の極楽浄土確認）を以て正しい安心の指標としてゐることは、浄土信仰に生きる限り、親鸞未生の世に遡って正当なのである。それを捨てては、後生善処も滅罪生善も成り立たないのである。三界に輪廻せざるを得ない悪因縁を断絶して遙かなる西方の浄土に往生することが後生善処なのであり、この穢濁の世界を厭離することが滅罪なのである。地上である限りどのやうな好条件に充たされた、寿福の地に生まれたところで、それは善処といふに価ひしないのである。道長の阿弥陀堂建立に始まる法成寺経営に、立体的浄土変相を造出するといふ独特の意図のあったことは認めねばならないと思ふけれども、それを直ちに地上の浄土建設の本意であったといふことはできないと思ふ。その目的は、願文に見える通り、家門に祟る怨霊を調伏して、子孫の現世安穏の保障を確認することにより、臨終を正念にして迎へたかったからであった。九体の阿弥陀如来を安置した無量寿院落慶の前々年に詠まれた「この世をばわが世とぞ思ふ」の歌にも知られる通り、道長には全く欠けたることがなかった。たゞ気になることは、この満ち足りた有形無形の財産を伝へるべき子孫の上に覆ひかぶさる危険の多分に潜む怨霊たちの存在である。道長存命の間は怨霊もその勢に厭されて祟り得ないでゐても、死後は必ず子孫に患ひを与へるであらう。それを思へば臨終の正念を乱されそうである。それでは後生善処はおぼつかない。このやうな惧れの心が発願の動機であったことは、まことに興味ある問題を提供してくれる。

以上道長の性格心情乃至修養について概略を述べたわけであるがその性格については史料大成本「小右記」の解題に、矢野太郎氏の藤原実資の筆録資料から結論した興味深く且つ示唆に富む所見があり、法成寺の経営に関しては、家永三郎氏の「上代仏教思想史研究」と「日本思想史における否定の論理の発達」に、その業迹と心理的根拠の問題とが懇切に確実に解明されてをり、松村博司氏の

「栄花物語の研究」には法成寺と栄花物語と往生要集との連繋の問題について詳密な研究が示されてゐる。その一連の問題について、その他の国文学、史学、仏教学各方面の諸先覚の業績も多く、特に最近の業績では岩波講座「日本歴史、古代史(4)」の、薗田、田村両氏の「平安仏教」は啓沃されるところが多かったことを付記しておく。

以上この論文を書かうとした私の動機の提示だけに終った。この文章の本意はここから出発する。また書いてゐて省いた部分も少なくない。紙数と時間との制約の故である。次の機会に続けて発表したいと思ふ。

注

(1) 日本書紀神代下、一書。
(2) 栄花物語、疑。
(3) 大鏡道長伝。逆説的に考へることも可能ではあるが、すなほに文面通り受取るべきであらう。
(4) 大鏡、昔語。大井川三船の話は史実か否か疑はしい点もありはするが、公任の道長に対する態度と、道長の公任に対する待遇と、共に甚だよく描写してゐて、その意味での信頼性は高いと思ふ。
(5)・「宿世」観については紙面の関係で別の機会に述べる。
(6) 大鏡、道隆伝。師尹伝。隆家をいみじうもてはやしたことや、小一条院に道理を過ぎて奉仕したことなど。
(7) 御堂関白記、寛弘三年三月二十八日。同四月四日、五日七日。
小一条阪東宮辞退後の待遇には、道長の心弱さの一面がうかがへて、滅罪を善への憧憬の源を覗いたやうな気がする。
(8) 小右記、寛仁二年六月廿六日。
(9) 栄花物語、うたがひ。
(10) 小右記、寛仁二年五月二日
(11) 権記、長保四年。
御堂関白記、寛弘元年
同、小右記、権記、寛弘二年
(12) 御堂関白記、寛弘七年八月廿九日。